

〈巻頭言〉 深圳訪問所感 …………… 1	NEARセンター研究員の研究活動⑩ …………… 5
富山大学極東地域研究センターとの研究会の開催 … 2	NEARセンター短信 …………… 6
第4回市民研究員定例研究会 …………… 3	
第26回日韓・日朝交流史研究会 …………… 4	
第8回交錯する北東アジアアイデンティティの諸相研究会の報告 … 5	

深圳訪問所感

NEARセンター研究員 李 曉東

1月の末に、香港で開催されるシンポジウムに参加した。トランジットの形なら余計な手続きが要らないが、代わりに一度隣の深圳で通関手続きをしなければならぬため、ついでに深圳を視察することができた。

深圳は中国「改革・開放」政策の最初の「実験田」としてあまりにも有名である。80年代まで文字通り一面の田んぼだったこの地は、わずか20年も経たないうちに中国でも有数の大都市へと変身した。80年代の深圳はニューフロンティアのようなところだった。多くの若者がそれぞれのドリームを膨らませながらここにやってきた。そして、90年代になっても、深圳は依然として時代の先頭に立っていた。ここで発された鄧小平の「南巡講和」と呼ばれる「改革・開放」の加速の号令は、中国の経済高度成長の新たな起点になった。中国政治を講義する者として、早くからこのシンボルを自分の目で確かめたかった。

鉄筋コンクリートに挟まれている感じの香港の窮屈さと比べて、深圳市内はだいぶ広がりを感じる。整然とした道の両側が街路樹に覆われており、建物は皆新しい。「拆」（取り壊し）という字も見えないし、工事現場もあまり見かけない。インフラ整備は一段落したようである。わずか30年の歴史しかもたない都市ではもちろん古い市街区などもない。深圳は「改革・開放」の象徴だが、深圳の象徴となるものを見つけるのが難しいようである。

休日の海辺の公園では人で賑わっている。数多

くの車を見れば、ホワイトカラーがすくなくないようである。しばらく歩くと、周りは20～40代の若者ばかりで、年寄りや子供は滅多に見あたらない、ということに気づいた。いままでの深圳の歩みを考えれば納得させられるが、若者の多さで活気を感じるよりも、むしろ一種の非日常の異様さを感じざるを得ない。何しろ、見渡す限り、あたり一面に皆年の近い人ばかりで、あまり生活の雰囲気を感じないからである。深圳という都市はひとつの巨大な働き場だといえるかもしれない。

21世紀になって、しばらくあまり人々の話題に上っていなかった深圳は、2010年に、人々を震撼させた「富士康跳楼」事件で再び注目的になった。台湾のメーカー「富士康」は80万人従業員を擁している世界最大のOEM企業である。その深圳の工場は、1月～11月の間に、14件の飛び降り自殺事件が相次いで起こった。過重労働や、生産ラインの単純作業、厳しい管理と競争、劣悪な居住環境、などがその原因だといわれている。「改革・開放」の起点と市場経済の深化の象徴として時代をリードしてきた深圳は、市場経済の深化に伴う歪みを極端な形で表したことになった。

もしこのような現象を初期資本主義の象徴だということであれば、「中国特色のある社会主義」、そして、「社会主義市場経済」という造語の意味をもう一度噛み締めなければならないのではないかと。深圳は、「改革・開放」を振りかえり発展のあり方を再考する新しい起点になるだろうか。

富山大学極東地域研究センターとの 研究会の開催

2011年1月13日、富山大学極東地域研究センター准教授・山本雅資先生をお迎えして、「富山におけるロシア向け中古自動車輸出—現状と課題—」を御報告頂きました。山本先生の御専門は環境経済学で、「使用済み製品の経済は通常の経済と異なるのか」という問題意識から、東アジアを中心とした国際資源循環の問題に取り組んでおられます。以下、山本先生の御報告内容を要約します。

まず、山本先生はロシア向け中古自動車輸出ビジネスの背景や事実関係を紹介されました。もともと日本はロシアから木材や水産資源を輸入していましたが、その帰りがなかったところ、日本国内で自動車リサイクル法が施行され廃車コストが高まり、さらに富山港とウラジオストック（当初はナホトカ）を結ぶ定期便が1992年に就航し、1990年代から対露中古自動車輸出が盛んになりました。日本海側の富山港や新潟港では、中古自動車輸出が最大の取り扱い貨物で、今や日本からロシアに輸出された中古自動車のうち日本海側の港からの輸出が全体の62%（2008年）を占めるとのこと。山本先生によれば、富山での中古自動車輸出ビジネスの主役はパキスタン人で、1994年からビジネスが立ち上げられ、2001年頃に急増し、ピーク時にはパキスタン人経営の中古自動車販売業者はおよそ300社に上ったといます。しかし2008年の金融危機で石油などの資源価格の急落によりロシア経済が打撃を受け、ロシア政府が保護主義的政策に舵を切ると、ロシア向け中古自動車輸出も陰りを見せ始めます。ロシアでは輸入自動車関税が大幅に引き上げられ、日本からの輸出の90%程度を占める車齢3～7年程度の中古自動車の関税増加率は3～7倍となり、対露中古自動車輸出は激減しました。山本先生によれば、2008年に日本から対外輸出された中古自動車は約134万台、そのうち対露輸出は約56万台だったのが、2009年にはそれぞれ約67万台、約5万台に減少、富山県からの対露中古自動車輸出は、2008年に約18万台だったのが、2009年に約2万台へと減少しました。2010年夏以降、ウラジオストックの中古車市

場は活気を取り戻しつつあり、分解して中古自動車を機械部品として持ち込んだり、関税上昇率が小幅な小型車の人気が高まったりしているといいます。山本先生は今後の研究課題として、ロシア極東地域の自動車販売市場における日本車のブランド力を市場構造の実証的計測により把握するべく、理論モデルを構築する作業に傾注しているとのこと。豊富なデータやエピソードを交えた山本先生の御報告の後は、研究会参加者との間で活発な質疑応答と意見交換がおこなわれ、有意義な研究会となりました。

（研究員 佐藤壮）



報告される富山大学極東地域研究センター
准教授・山本雅資先生



報告後の質疑応答

第4回市民研究員定例研究会

2011年1月29日（土）、第4回市民研究員定例研究会が開催された。毎年恒例となりつつあるが、この時期の定例研究会は市民研究員の方々がそれぞれ自身で進められている研究調査についての報告会となっている。本年度の会では総勢7名の市民研究員から報告があり、ひじょうに盛況であった。以下報告の順に紹介したい。

第一報告は、中政信氏による「諸書にみる石見の国の紙について」である。報告では、平安時代の『延喜式』から「パークスの日本紙調査報告書」に至る各種の資料が示され、石見国の紙にかんする記述が丁寧に検討された。

第二報告は、橋ヶ迫劭氏による「16世紀の東アジア銀経済の普及と石見銀山」である。報告では、ユネスコ世界文化遺産として登録された石見銀山にかんして、16世紀に開発が盛んとなった状況が、明帝国の経済政策やポルトガル、スペインのアジア貿易の展開などをふまえて詳細に解説された。

第三報告は、岡崎秀紀氏の「明治の仏教熱心家フォンデスと島根～明治26年来県、新仏教徒運動・能海寛との関わり」である。宍道町出身の長富氏の墓に「英国海軍大佐普音天寿書」とあるところから探索が始まり、明治期半ばの英国の仏教熱心家フォンデスの山陰講演の事実やその人物像を探求していく調査プロセスが臨場感をもって報告された。

第四報告は、森須和男氏による「韓国鬱陵島のスルメと隠岐島」である。本報告は、鬱陵島の鰯産業と隠岐島の水産技術との関わりについて文献資料や現地調査にもとづき探求した成果の一端であり、鬱陵島の鰯加工の状況などが現地調査によるインタビューや写真を交えて紹介された。

第五報告は、田中文也氏による「古代史（邪馬台国）サミットの成功と邪馬台国の位置」である。ここでは、報告者が主催し成功裏に開催された「古代史（邪馬台国）サミット」についての報告と、邪馬台国の位置検証の論文についての紹介が行われた。

第六報告は、阿部志朗氏による「なぜ、石見の

窯業製品は広まったのか？—日本海沿岸の陶器・瓦の分布からその秘密を探る—」である。本報告では、石見焼製品が日本海沿岸部で広範囲に見つかること、またその広がりが北海道や韓国の鬱陵島でも確認されることが、丁寧な実地調査によって検証された。

第七報告は、大橋美津子氏による「石見地域は安全でおいしい食を北東アジアに売り込む拠点となり、それを浜田港の活用につなげることができるか」である。本報告は昨年度NEARセンターが取り組んだ浜田の食プロジェクトの一環であり、石見地域の「食」の生産者と浜田港関係者にたいする聞きとり調査を行った県内班の成果が紹介された。

紙幅の都合もあり簡単な紹介にとどまるが、市民研究員の方々の多彩なテーマに加えて、それぞれの丁寧な実地調査と文献渉猟が印象に残る密度の濃い研究会であった。

（研究員 坂部晶子）



報告する中政信市民研究員



市民研究員からの質問

第26回 日韓・日朝交流史研究会

2010年12月11日（土）の第26回日韓・日朝交流史研究会は、本センターと啓明大学校国境研究所（IBS）主催による第4回竹島／独島研究会（「竹島／独島研究会」に関してはNEAR News第33号を参照）とあわせて開催された。「未来志向的な韓日関係のために—領有権問題を越えて—」というテーマのもと、韓国の古都、慶州の現代ホテルで開かれたものである（これまでの開催地：第1回島根県立大学、第2回韓国啓明大学校、第3回広島大学）。日本側からは井上治センター長、福原裕二研究員、森須和男市民研究員の3名が、韓国側からは韓国所在の大学や東北亜歴史財団に所属する数名の研究者がそれぞれ報告者や討論者として参加した。

研究会の冒頭では、まず韓国側の代表者（李盛煥啓明大学校教授）と日本側の代表者（井上センター長）による挨拶があり、その後、研究会の趣旨、意義などが述べられた。それに続いて研究会が始まった。今回の研究会は例年通り、全体を3つのセッションに分け、各セッションで報告とそれに対する質疑応答・討論が行われた。プログラムは次の通りである。

第1セッション（司会：李盛煥）

報告①：「韓日領有権論争再考」玄大松（国民大学校）

報告②：「竹島と島根県②」福原裕二

討論：リュジェソン（啓明大学校）、森須和男

第2セッション（司会：福原裕二）

報告①：「韓日関係における領土教育の現在的意味—慶尚北道と島根県の独島／竹島教育を中心に—」朴昶建（国民大学校）・カンギョンリ（サンミョン大学校）

報告②：「島根県作成『竹島学習用副教材DVD』に見る『竹島／独島』地域論の問題」井上治

討論：玄大松、ペギュソン（培材大学校）

第3セッション（司会：ナムサング〔東北亜歴史財団〕）

報告①：「天保竹嶋一件裁決後の鬱陵島と日本人

（Ⅱ）」森須和男

報告②：「日本の水産資源管理政策—独島／竹島周辺を中心に—」金竜珉（釜慶大学校）

討論：丁英美（東北亜歴史財団）、ホヨンラン（蔚山大学校）

第1セッションでは、玄大松氏が日本で発見された竹島／独島関連の地図について、福原研究員が新しく入手した島根県の行政文書に基づく島根県と竹島の関係について報告した。第2セッションでは本研究会では初めて触れられる竹島／独島に対する日韓の教育状況について、朴昶建氏は慶尚北道、井上氏は島根県を中心に、脱領有権（脱ナショナリズム）の観点から批判的な検討が行われた。第3セッションでは、森須氏がこれまであまり研究されていない幕末から明治初期の鬱陵島と日本人の関係についての考察を行い、金竜珉氏が水産業を中心とした日本海に対する日本の政策を明らかにし、漁業における全体的な状況について整理した。全体的には研究会のメインテーマに示されているように、未来志向の日韓関係のために、脱領有権（脱ナショナリズム）の観点を含めつつ、両国の関係を対立関係ではなく融和関係としてとらえようとする報告が多数を占め、有意義な会となった。

（助手 鄭世桓）



第8回 交錯する北東アジアアイデンティティの 諸相研究会の報告

2010年6月24日(木)、本学講義研究棟会議室Bにおいて、第8回交錯する北東アジアアイデンティティの諸相研究会が開催され、林裕明研究員による「ロシア経済研究の視点からみた『北東アジア学』の創成可能性について」と題する報告が行われた。同研究員がこれまで取り組んできた現代ロシア経済研究の視点から、広く北東アジア諸国の比較研究を通して「北東アジア学」の創成の可能性について考察した。

まず同研究員は、北東アジア経済をみる視点として、①多様性の大きさ、②世界の経済成長センター、③体制移行、④拡散と収斂による多様な経済システム像があることを指摘しながら、北東アジア経済には二つの側面が存在することを分析する。すなわち、従来から論じられてきた地域経済圏としての北東アジアが垂直統合の発展を示しつつも統合の度合いの低さや共通の統合理念が欠如し、リスク・不安定要因が大きいという一般的な結論がもたらされる一方、比較経済体制論からみた場合、北東アジアに超域現象としての体制移行がみられ、そこに「北東アジア学」の創成可能性が見出されるのではないかと指摘するのである。

さらに同研究員は、北東アジアにおける体制移行が体制の違いを超えた開放的で多様な経済システムをもたらしつつあり、その比較考察の課題を論ずる。その際、P.ホール、D.ソスキスによる諸制度の結びつき方から類型化した①コーディネートされた市場経済、②自由な市場経済、B. アマールの「5つの資本主義」、すなわち①アングロ=サクソン型、②アジア型、③大陸欧州型、④社会民主主義型、⑤地中海型といった類型化の先行研究を引照しながら、北東アジア各国の経済システムの特徴を考察することが建設的な論議につながることが強調された。

1990年代以降顕著となったグローバリゼーションは、北東アジアにおける市場経済化を推し進め、その経済システムの転換をもたらすと共に、各国の経済システムが単一の方向に収斂するので

はなく、むしろ拡散と収斂を繰り返す形で多様な経済システムが生まれつつある。それらを包括的に考察するためのアプローチを提示することを試みる本報告は、北東アジア学創成を構想する本研究会において示唆深いものとなった。

(研究員 江口伸吾)

NEARセンター研究員の 研究活動⑩

◀センター研究員の活動をリレー連載で紹介しています。今号は新井健一郎助手にご執筆いただきました(編集部) ▶

ここ数年間はカナダの哲学者、チャールズ・テイラー(1931~)が〈人間〉や〈社会〉をいかに理解しているのかを勉強してきた。テイラーは、多文化主義や共同体主義、西洋近代のアイデンティティ論などの文脈でよく参照される思想家である。〈文化〉・〈共同体〉・〈アイデンティティ〉といったことばが示しているように、なんらかの共同性や集団性を出発点として人間を理解する立場をとる人物であるといえる。もちろん、いわゆる脱呪術化を経た近代以降の西洋社会では——また近代におけるさまざまな全体主義の暴力をも経験した世界では——共同性や集団性を無批判・無邪気に前提とすることはもはやできない。テイラーはいかなる議論に基づいて全体論を擁護しているのか、テイラーがアトム的な個人主義を相対化して西洋近代社会における〈意味の不在〉を〈意味づけ〉ようとするとき、なにを根拠にそうしているのか——こういった問いを念頭に、解釈学の伝統に拠りながら近代的な全体論を再考・再興してきたテイラーの足跡をとりあえず自分なりに整理してみようというのが、これまで取り組んできた勉強の主な内容である。

しかしこういったことをいちはじめは続けながらも、専門はなにか、なにを研究しているのかと聞かれるときには、いつもきまりの悪さを感じながらそれに答えてきた。北東アジア地域研究センターに属しながら〈北東アジア地域〉の研究に直接とりくむことができていないこと、これがきまりの悪さを感じる一因となっているのはいうまで

もない。また、専門の領域は漠然と〈社会政治思想〉ということにしているが、これはより確立された既存の学問領域（ディシプリン）のなかに自らの勉強を位置づけることができずに間に合わせでそのように答えているのであって、やはりきまりが悪い。さらには、勉強の対象としてきた人物とその思想・問題圏にあまり共感や関心をもつことができず、テイラーという固有名詞を口にせねばならないときに大きな違和感をもってしてきたというのも事実である。

このきまりの悪さを少しでも減じようと、勉強の軌道修正をはかっている。上述のような政治思想の諸分野でよく引用されるテイラーは、1950・60年代にはイギリスのニューレフト運動のなかで中心的な役割を果たしていた人物である。このことはよく知られてはいるものの、これまであまり詳しくは論じられてこなかった。1950年代から70年代あたりにかけてのテイラーの初期著作を足がかりに、その周辺の著述家も視野に入れつつイギリスのニューレフト運動におけるマルクス＝ヘーゲル理解・再解釈——とりわけ人間主義的マルクス主義を中心とした議論——を整理する、さしあたりそういった方向にむけて資料の収集や読書を今年度からすすめている。歴史的な視点・手法が入ってくることで、また〈社会〉思想の問題圏により接近することから、取り組む学問領域は自ずとこれまでよりも明確になる。また、西欧マルクス主義や初期マルクスにおける抽象的普遍性批判の根拠について勉強したいという、筆者のもともとの関心にもより近づけてゆけるものと考えている。〈北東アジア研究〉については引き続き課題ではあるが、宇野前学長を中心としてNEARセンターで展開されてきた議論のなかには、これまでにテイラーとの関わりで勉強してきたさまざまな問題圏と密接に結びつくものが多い。それを手がかりとしつつ、センターでの多様な研究活動に触れるなかでさらに問題関心を育んでゆくことができるものと確信している。

（助手 新井健一郎）

NEARセンター短信

●秋学期の調査・報告活動(2010年10月～2011年3月)

○井上治研究員

- ・広島市にて広島在住民間人所蔵のモンゴル関係資料を調査（10月8日）。
- ・本学にて日中韓合同国際シンポジウム「北東アジア研究と北東アジア学の可能性」にて「北東アジアの白樺樹皮文化—環境・社会・伝統・歴史からの北東アジア学—」報告（10月12日）。
- ・東京都・東京学芸大学にてモゴール語研究会出席（10月16日）。
- ・京都府・大谷大学にて科研A「世界遺産エルデニゾー僧院に関する総合的研究—過去の復元から未来への保存へ—」(代表:松川節大谷大教授)出席（10月23日）。
- ・津和野町にて西周シンポジウム出席（10月31日）
- ・浜田市内にて石見観光プロジェクトによるモニターツアー実施（11月6日）。
- ・横浜市にて「北東アジア学創成叢書（仮称）」の編集打ち合わせ会議（11月14日）。
- ・本学にて日韓・日朝交流史研究会参加（11月19日）。
- ・東京都・東京学芸大学にてモゴール語研究会出席（11月27日）。
- ・韓国慶州にて竹島研究会に参加、報告(12月11日)。
- ・東京都・東京学芸大学にてモゴール語研究会出席（12月18日）。
- ・モンゴル・ウランバートル市にて次期共同研究プロジェクトに関する打ち合わせと事前調査（12月22～25日）。
- ・韓国・釜山にて資料収集（12月27～30日）。
- ・本学にて石見観光プロジェクトによる聞き取り調査（1月17日）。
- ・東京都・東京学芸大学にてモゴール語研究会出席（1月22日）。
- ・ポーランド・クラクフ市にてコトヴィチ・コレクションの調査（2月11～20日）。
- ・東京都・東京学芸大学にてモゴール語研究会出席（3月1日）。
- ・東京都・東京学芸大学にてモゴール語研究会出席（3月19日）。

○江口伸吾研究員

- ・ 笹川日中友好基金「日中関係40年史（1972～2012）」（政治篇）事業の研究活動（10月2・5日、11月20日）。
- ・ 島根県立大学で開催された日中韓合同国際シンポジウム「北東アジア研究と北東アジア学の可能性」に司会者として参加（10月12日）。
- ・ 成蹊学園創立100周年・成蹊大学アジア太平洋研究センター設立30周年記念連続講演会「人間の安全保障と北東アジア—サステイナブルな地域社会をめざして—」に参加（10月16日）。
- ・ 東京大学(駒場)で開催された2010年度アジア政経学会全国大会に参加（10月23～24日）。
- ・ 島根県立大学で開催された旧NEAR財団共同プロジェクト研究会「中国基層社会の矛盾と社区建設」にコメンテーターとして参加（2月10日）。
- ・ 島根県立大学で開催された「交錯する北東アジアアイデンティティ研究会」主催のワークショップ「中国の北東アジア研究の現段階」にコメンテーターとして参加（3月3日）。

○坂部晶子研究員

- ・ 島根県立大学にて開催された日中韓合同国際シンポジウム「北東アジア研究と『北東アジア学』の可能性」の第2セッション「文化・歴史分野」で司会を担当（10月12日）。
- ・ 島根県立大学にて石見中国観光誘致プロジェクトにかかわる会合に参加（1月17日）。
- ・ 宇都宮市にて科研テーマにかかわる資料収集（1月23日～25日、2月21日～24日）。

○唐燕霞研究員

- ・ 中国・南京にて科研費プロジェクト「中国都市基層社会の自治に関する調査研究」（基盤B・代表：唐燕霞）の現地調査・資料収集（12月21日～12月28日）
- ・ 島根県奥出雲にて旧NEAR財団助成金プロジェクト「『単位』人から『社区』人へ—中国都市部における「社区」アイデンティティの創出と住民自治のあり方」（代表：唐燕霞）の現地調査（1月28日～29日）
- ・ 旧NEAR財団助成金プロジェクト「『単位』人から『社区』人へ—中国都市部における「社区」

アイデンティティの創出と住民自治のあり方」（代表：唐燕霞）のワークショップの座長（2月10日、島根県立大学にて）

- ・ 科研費プロジェクト「中国都市基層社会の自治に関する調査研究」（基盤B・代表：唐燕霞）研究会の開催（2月12日、一橋大学にて）
- ・ 中国・杭州にて科研費プロジェクト「中国都市基層社会の自治に関する調査研究」（基盤B・代表：唐燕霞）の現地調査・資料収集（2月13～18日）

○林裕明研究員

- ・ 島根県立大学にて、日中韓合同国際シンポジウム「北東アジア研究と『北東アジア学』の可能性」において「日露経済システム比較の視点からみた「北東アジア学」創成可能性について」と題する報告（10月12日）。
- ・ 京都大学で開催された比較経済体制研究会例会にてAnna Lukyanova氏（ロシア国立高等経済大学）の報告“Global economic crisis in Russia: the labor market impact, social consequences and policy responses”に対するコメント（10月29日）。
- ・ 京都大学で開催された比較経済体制研究会例会にて横川和穂氏（日本国際問題研究所）の報告“Centralization and local public finance in Russia”に対するコメント（11月7日）。
- ・ 島根県立大学にて、旧NEAR財団共同研究「北東アジアにおける社会経済的課題の共有化—民間レベルでの協力関係の構築に向かって—」にかかわるワークショップの開催および報告“Changes of Russia-Japan Economic Relations and Problems of Sea Ports on the Coast of Japan Sea”（2月4日）。
- ・ 京都大学にて、同大学経済研究所主催国際コンファレンス「ロシア企業社会の構造と深層」への参加および「ロシアにおける生活様式の変化と労働モチベーション」と題する報告（2月12日）。

○福原裕二研究員

- ・ 島根県立大学（日中韓合同国際シンポジウム）にて、「日韓領有権問題と北東アジア学：竹島／独島研究の新視点」と題する報告（10月12日）。
- ・ 島根県松江市（第5回島根県竹島問題研究会）にて、「島根県と竹島」と題する報告（10月24日）。

- ・ 島根県松江市（島根県庁）にて、科研・財団研究助成金に関わる調査（11月24日）。
- ・ 島根県出雲市（出雲郷土大学）にて、「『真の』日韓交流のために」と題する講演（11月28日）。
- ・ 島根県松江市（島根県庁）にて、科研・財団研究助成金に関わる調査（12月3日～4日）。
- ・ 韓国慶州（第26回日韓・日朝交流史研究会兼第4回竹島／独島研究会）にて、「島根県と竹島②」と題する報告（12月11日）。
- ・ 島根県立大学（ロシア海洋大学との合同ワークショップ）にて、「漁業問題と領土問題の交錯（Ⅱ）」と題する報告（2月4日）。

○李曉東研究員

- ・ 現代中国学会で2010年度年次大会に出席し討論者を務めた（10月17日）。
- ・ 津和野で開催される「西周シンポジウム」を主催し、討論者を務めた（10月31日）。
- ・ 明治大学開催される研究会で近代中国憲政に関する報告を行った（11月6～7日）。
- ・ 香港大学で開催される中華日本哲学会主催の国際シンポジウムに出席し報告を行った（1月15～16日）。

○パールィシェフ・エドワルド助手

- ・ モスクワの東洋学研究所・日本研究者協会が発行する年鑑『日本』には拙稿「1906～1907年の日露交渉の舞台裏——本野一郎の外交」（3 а ку л и с а м и р у с с к о - я п о н с к х п е р е г о в о р о в 1906-1907 г г . : Д и п л о м а т и я М о т о н о И т и р о // Я п о н и я 2010: Е ж е г о д н и к . М : А И Р О Х Х I , 2010. С. 274-292）が掲載された（11月）。
- ・ 科研費（「研究活動スタート支援」）の研究活動として東京を訪れて、外交史料館や防衛研究所などで資料収集を行なった（12月12～19日）。
- ・ 科研費（「研究活動スタート支援」）の研究活動としてモスクワを訪れて、ロシア帝国外交史料館、ロシア国立軍事史資料館、ロシア国立図書館などで資料収集を行なった（1月10～23日）。

NEAR News 第39号

2011年3月発行

【編集発行】

島根県立大学北東アジア地域研究センター
〒697-0016

島根県浜田市野原町2433-2

Tel 0855-24-2375

Fax 0855-24-2383

E-mail: near-c@u-shimane.ac.jp

ホームページ: <http://www.u-shimane.ac.jp/36near/>